オペラ

現代に映す 男女の心模様

コジ・ファン・トゥッテ

オペラ演出では、原作の時代設定や舞台を変更する「読み替え」という手法がしばしば使われる。例えば、古代ギリシャが戦後の日本、16世紀英国から現代米国に、といったふうに。大胆な読み替えに対しては賛否が分かれることもあるが、思いがけない発見をもたらす効果がある。

みつなかホール（兵庫県川西市）で11月に上演されたモーツァルトの「コジ・ファン・トゥッテ」（イタリア語上演、日本語字幕）では、18世紀末とされる時代設定を現代に移し、平易な日本語訳を試みた。国内外で数々のオペラを手がける井原広樹が演出した。

幕開き、キャバレー風のセットで、肌を露出した女性たちが踊る。フィオルディリージ、ドラベッラ姉妹の恋人は、友人同士。男たちは、自分の恋人の美貌と貞節を自慢する。やがて、恋人の貞操を巡って賭けが始まる。

フィオルディリージの恋人グリエルモと、ドラベッラの恋人フェランドは、「出張に行く」とうそをついて不在になり、別人に変装して姉妹を誘惑する。国際空港の雑踏シーンでは、ビジネスマンや旅行者がスマホとスーツケースを手に、慌ただしく行き交う。原作の「戦地に向かう」と偽る設定を、現代らしく読み替えた。

男たちの変装も斬新だ。映画「星の王子ニューヨークへ行く」でエディ・マーフィーが着た衣装をイメージしたという服はとびきりゴージャスで、2人が歩いた床には、花がまかれる。

姉妹の気を引くために、男2人が毒薬を飲んで倒れる場面にはAED（自動体外式除細動器）まで登場。医師に扮した人らが、大げさな動作で蘇生を試みると、客席からも笑いが起こった。

理性の重要さを説く歌詞の日本語訳は〈ポジティブに考えれば、荒れ放題の世の中でも乗り越えられる〉と、分かりやすく工夫されている。

井原は「崩壊や理不尽など何が起こっても人生は続き、人は生きる動機を見いだせるという思いを込めた」という。「終盤は悲劇的」と評されることも多い原作オペラ。翻案によって喜劇色が強まり、最後まで笑って、前向きな気持ちになれた。

（青木さやか）

空港の場面では、2組のカップルが「出張」のために、それぞれの恋人に別れを告げる（いずれもみつなかホール提供）

恋人の出張中に現れた男たちに、戸惑いながらひかれていくフィオルディリージ（左から2人目）とドラベッラ（同3人目）

新しい出会いに心を弾ませるフィオルディリージ（左から3人目）とドラベッラ（同4人目）

コジ・ファン・トゥッテ　ロレンツォ・ダ・ポンテの台本を基にモーツァルトが1790年頃に作曲した。「フィガロの結婚」「ドン・ジョヴァンニ」と合わせて「ダ・ポンテ3部作」と呼ばれる。

題名は「女はみなこうしたもの」の意味。初演時は「破廉恥」「不道徳」などと批判も多く、上演が途絶えた時期も長かった。19世紀後半から再評価され、人気作品の一つとなった。

別れの切なさを歌う1幕の五重唱など、優れた重唱が多い。フィオルディリージが貞操を語る「岩のように動かずに」や、女中が自由な恋愛を促す「女も15になれば」など、人物の心情や特徴を捉えた名曲も並ぶ。

みつなかホール公演の演奏はザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団。指揮は牧村邦彦。山口安紀子、十合翔子、白石優子、伊藤絵美らがダブルキャストで出演した。